

西本願寺本『兼盛集』巻末所載の大式三位の和歌をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中, 周子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4649

西本願寺本『兼盛集』卷末所載の大式二位の和歌をめぐって

中 周 子

一 はじめに

西本願寺本『平兼盛集』の卷末に兼盛とは関わりのない詠者の歌々(十二首)がおかれており、佚名家集の一部が混入したものと考えられている。その歌群中に紫式部と娘賢子の歌が含まれている。(注1)

同じ宮の藤式部、親の田舎なりけるに、いかになど書きたりける文を、式部の君なくなりて、そのむすめ見侍りて物思ひ侍りけるころ見て、書きつけ侍りける

憂きことのまざるこの世を見じとてや空の雲とも人のなりけむ
まづかうく侍りけることを、あやしうかの許に侍りける式部の君の

雪つもる年にそへても頼むかな君をしらねの松にそへつ、

このむすめの、あはれなる夕をながめ侍りて、人の許に同じ心になど思ふべき人や侍りけむ

眺むれば空に乱る、浮き雲を恋しき人と思はましかば

「同じ宮」は同じ歌群中の詞書に「大宮の小式部の内侍」とあることから、「大宮」と呼ばれた上東門院彰子のことである。いうまでもなく大宮の藤式部といえば紫式部のこと、「むすめ」は大式三位賢子のことである。詞書には次のような事情が記されている。紫式部が越後守として赴任中の父為時に安否を尋ねる文を送った。その手紙を、紫式部の死後に、娘の賢子が目にした。亡き母の手紙には老祖父の健在を祈った歌がしたためられていた。老祖父の長寿を祈った母が先に逝つてしまった。やりきれない悲しみに沈む賢子。そして、しみじみとした夕暮れに恋人に歌を詠みかける賢子。そのような詠作事情を記した詞書をともなつて、紫式部を追悼する歌、紫式部の生前の詠、賢子の歌の三首が並ぶのである。

これらの歌が注目されたのは、まず紫式部の没年を推定する資料としてであった。岡一男氏(注2)や萩谷朴氏等による研究がある。あるいは、南波浩氏は二首目の歌の内容が「年老いた父の身を切々と祈り案じ」(注4)た歌であることから、肉親への情愛を詠じた歌を取めない家

集からは窺えない紫式部の「本姿」が現われた歌であることを強調された。また、森本元子氏は佚名家集自体の性格や編者を研究され、編者を推定する有力な根拠の一つとしてこの三首に注目され、編者を紫式部と親交のあった「宰相の君」であろうと推定された。ちなみに、岡一男、萩谷朴の両氏は考察の過程で佚名家集の編者(作者)を、賢子の恋人であった藤原頼宗(岡説)、または藤原定頼(萩谷説)であると推定しておられる。このように、冒頭にあげた三首は従来から注目され、紫式部の没年や性格あるいは佚名家集の編者を特定する資料という観点からは考究されてきた。しかし、賢子の和歌が取り上げられ、その表現について考察されたことはなかった。本稿では、他集に見られない賢子詠が含まれていることに注目し、その表現と内容の分析を通して、賢子の和歌が紫式部の表現を継承している点について考察したいと思う。

二 賢子の和歌とその内容

まず、三首の歌のいずれが賢子詠であるのかについて、従来の説を整理しながら考えておきたい。二首目が詞書に「式部の君の」とあつて紫式部の遺詠、三首目が「このむすめ」賢子の詠であることは明らかである。ところが一首目の作者については、賢子の歌とするか、賢子を慰める家集作者の詠とするかの二通りの解釈がなされている。

賢子詠とする萩谷氏は、一首目の歌は「母の手紙の余白に書きつ

けた歌」で、三首目と「空」雲「憂き」浮き」等の用語の共通することを指摘されている。一方、家集作者の詠とする森本氏は、用語の共通することには言及されず、詞書の「見て書きつけ侍りける」の主体を家集編者とされるのである。すなわち、詞書の「見て書きつけ侍る」の主体を賢子と家集作者のいずれに解釈するか、歌の語句が三首目と共通することをどう考えるかの二点が問題になつてくる。

まず、詞書の「見て書きつけ侍りける」の主語を賢子とすれば、「亡き母の文を賢子が」見侍りて物思ひ侍りける頃、(その文を賢子が)見て書きつけ侍りける」となる。が、「見侍りて……」と「見て書きつけ……」と、賢子が母の手紙を見たことを二度繰り返す詞書は不自然ではなからうか。わずか数ヶ所の詞書のみから筆致を分析することは無理かもしれないが、他の詞書にはそのようなどい筆致は見られない。賢子が「書きつけた」ならば後の「見て」は不要であろう。むしろ、「見て書きつけ侍りける」の主体を家集の作者として、亡き母の手紙を見て物思いに沈みがちな賢子の様子を、家集作者が見て書き付けたとする方がすっきりする。森本氏の解釈に従いたい。

では、一首目と三首目との用語が共通する点についてはどう考えられるであろうか。共通の言葉を含む歌句は「空の雲」と「空に乱るる浮き雲」である。死者を悼む歌に「雲」や「空」を用いること、「浮き雲」に「憂し」を掛けることは、いずれも常套的な発想・技巧といえよう。

ところで、両首を読み比べてみると、三首目が空の浮き雲を眺めて「恋しき人とおもはましかば」と故人を偲ぶ歌とすれば、一首目は「憂きことのまざるこの世を見じとてや」と、いやなことの増すばかりのこの世を見るのがいやであの方は空の雲にでもなったのでしようかと、故人の心中を忖度しており、紫式部と同年輩の物言いの感がする。

紫式部の「憂き世感」は日記や家集中に繰り返して書き留められている。ことに、紫式部と小少将はじめ宮中の同僚女房とのやりとりの中にも「憂き世感」は共通の感情として歌われている。一首目の歌に歌われた内容に似た心境を「憂さのみまざる世」と詠じた紫式部の歌が、家集の巻末近くに「初雪降りたる夕暮に」ある人に送った歌として収められている。

ふればかく憂さのみまざる世を知らで荒れたる庭につもる初雪この詠は今井氏（注）によると「女房仲間の一人から見舞いの歌」で「宮仕えを止めて以来音沙汰がない式部を案じて」尋ねてきたのに対する返歌といわれている。一首目の歌は、生前にそのような「憂き世感」を語り合った同僚、すなわち紫式部を深く理解していた者による詠と考えられるのではないだろうか。

以上のように見てくると、賢子の和歌は三首目のみと考えられるのである。

では、賢子が詠じた和歌の内容を見てみよう。詞書によれば、しみじみと心にしみる夕暮の空を眺めて、同じ心で眺めてくれることを求めて、ある人に送った詠である。

この歌については、「同じ心など思ふべき人」は彼女の愛人の頼宗をさしたので、『人の許に』も彼の許にの意味をほかしたのであらう（岡一男氏）、「同じように亡き母のことを恋しく思い出してくれるであろう知人、おそらくは定頼か、または、寛仁三年ごろに結婚したと推定される公信のもとに送った賢子の歌（萩谷朴氏）、「むすめ賢子が恋人に贈った歌（森本元子氏）」と、従来から恋人にあてた歌と解釈されてきた。ただし、恋人にあてた恋の歌という解釈はなされていない。

例えば、森本元子氏は恋人に母親を失った悲しみを訴えた歌とされる。すなわち「人のもとに―同じ心でなど思ってくれる愛人がいたのでしょうか、ながむれば……（ながめやると、空に乱れる浮き雲、せめてあの雲でも、恋しい母上と思うことができるなら……）」「詞書の、『おなじ心に云々』は、『人のもとに』に対する注記である。悲しみを理解してくれるはずの人、わかい賢子には、すでにそういう男性があったことを、亡き母の友であるこの家集の作者は、むすめの歌にそえてしるした」と解釈される。一、二首に続く歌という文脈で見ると、確かに、亡き母を恋う思いを詠じたと考えるのが自然であろう。

しかし、歌は、大空に浮かぶ雲を眺めて恋しい人に思いを馳せる内容で十分に恋の歌とも解釈できそうである。また、詞書の「同じ心など思ひけむ」という表現はおそらく古歌をふまえたものと思われるが、「同じ心」は、次のように恋人も自分と同じように恋しく思っしてほしいという意を込めて恋歌に用いられた歌句でもあつ

た。⁹⁾

よそにしてこふればくるしいれひものおなじ心にいざむすびてむ
（古今集・恋一・五四一・読人不知）
ひとりのみおもへばくるし如何しておなじ心に人ををしへむ

（後撰集・恋二・六〇二・壬生忠岑）
こひしはおなじ心にあらずとも今夜の月を君見ざらめや

（拾遺集・恋三・七八七・源信明）
さらに後述するように、空を眺めて雲に恋人の面影を重ねて詠まれた先行歌が少なからず見いだせるのである。この歌を母を失った賢子が心細くなつて恋人を頼つて詠みかけたものと解釈することもできるように思われる。

この歌に恋の意味が含まれていると指摘されたのは岡・男氏であるが、「歌意は亡き母をしのぶとともに、頼宗を恋しくおもふ心をも含ませたものと考へられる」といわれる。恋の歌としても、まず母を哀悼する気持ち詠じ、その中に恋の意が含ませてあると解釈されている。

以下、賢子詠の用語表現を先行類歌と比較しつつ分析することを通して、この一首にこめられた心情を考えてゆきたい。

三 万葉集および三代集

における「雲」と面影

まず、この歌の発想、空に浮かぶ雲を眺めて「恋しい人」を偲ぶ

という発想の先蹤から見えてゆこう。この発想は、日本書紀に皇孫建王の死を悲しむ齊明天皇の詠に「今城なる小丘が上に雲だにも著くし立たば何か歎かむ」とある¹⁰⁾ほか、万葉集に多く先例を見いだすことができる。

①ただに逢はば逢ひかつましじ石川に雲立ちわたれ見つつしのはむ
②こもりくの泊瀬の山のまにいさよふ雲は妹にかもあらむ
③きのふこそ君はありしか思はぬに浜松の上に雲にたなびく
④こもりくの泊瀬の山に霞立ちたなびく雲は妹にかもあらむ
①は巻二の柿本人麿の死を悼む妻依羅娘子の詠である。また、火葬の煙が立ち上り雲と化すように見えることから、死者は雲になると実感されたのであろう。②は巻三の泊瀬の山で土方娘子を火葬した時の人麿の作。③は巻三の相伴三中の作、④は巻七の作者未詳歌であるが、いずれも②と同発想の挽歌である。

雲を眺めて偲ぶ、その面影は死者とは限らない。次にあげる巻十一に人麿歌集の歌とある⑤は、①と発想・用語ともにほとんど同じであるが、雲に恋人の面影を見る歌である。また、巻十二所収の⑥は夫を待つ妻の歌、巻十四所収の⑦と⑧は恋人が雲を見ることで互いの心を通わし合うことを願った相聞歌である。

⑤雲だにもしるくし立たばなぐさめて見つつもをらむただに逢ふまでに

- ⑥春日にある三笠の山にゐる雲をいで見るごとに君をしぞ思ふ
- ⑦あが面の忘れむしだは国はふりねに立つ雲を見つつしのはせ
- ⑧面形の忘れむしだはおほのろにたなびく雲を見つつしのはむ

確かに、微妙に形を変えながら流れて行く雲は人の容に見えることがある。死者と生者の別なく、目前にいない「恋しい人」の面影を雲に重ねて偲んだのである。

平安時代の例としては貫之集にも「きのふまであひ見し人のけふなきは山の雲とぞたなびきにける」(七七六)や「雨ふれば北にたなびく雨雲をきみによそへてながめつるかな」(八〇四)と亡き人や遙かなる人をしのお歌がある。ところが、三代集においては「おほぞらは恋しき人のかたみかは物思ふごとくに眺めらるらむ」(古今集・恋四・七四三・酒井人実)のように空を眺めて恋人を思う例はあるが、「雲」を詠む例を探すと、次の⑨のように自らの燃える恋の思いが煙となり雲となると詠み、また、⑩⑪の如く「雲」を亡き人を偲ぶ袂と譬えて詠まれているが、大空に浮かぶ雲を眺め恋しい人の面影を偲ぶという発想の詠は見られない。

⑨限なき思ひの空にみちぬればいくその煙雲となるらん

(拾遺集・恋五・九七一・藤原有時)

⑩すみぞめの君がたもとは雲なれやたえず涙の雨とのみふる

(古今集・哀傷・八四三・忠岑)

⑪墨染の衣の袖は雲なれや涙の雨のたえずふるらん

(拾遺集・哀傷・一二九七・読人不知)

雲を眺めて恋しい人の面影を偲ぶ発想は万葉集に多く見られるものであった。空にかぶ雲を眺めて思い起されるのは、亡き人であり、恋人であった。その意味では、賢子が「浮き雲」を重ねた面影は母親でも恋人でもありうるのであるが、ただし、両者を同時に偲

んだ歌はなかった。

四 「浮き雲」を詠じた先行類歌

「雲」に面影を偲ぶ発想は万葉集以来のものであったが、万葉集および三代集には「浮き雲」を詠み込む例は見当らなかつた。では、賢子はなぜ「白雲」でも「雨雲」でもなく「浮き雲」の語を用いたのであろうか。

勅撰集における浮き雲を詠む初出例は金葉集所収の、次にあげる四例である。

①月かげにはな見るよはのうき雲はかぜのつらさにおとらざりけり

(春・五六・大江匡房)

②恋ひわびてながむるそらのうき雲やわがしたもえのけぶりなるらん

(恋下・四三五・周防内侍)

③いまぞしるおもひのはてはよのなかのうき雲にのみまじる物とは

(雑下・六二一・平忠盛)

④さだめなきよをうき雲ぞあはれなるたのみし君がけぶりとおもへば

(雑下・六二二・藤原資信)

①から④まで、「浮き雲」はすべて「憂し」と掛けて用いられている。なかでも③と④が哀傷歌で、とくに④が賢子と同様の詠である。③の作者は忠盛(一〇九六―一一五三)で賢子より後の人、また④は詞書に「陽名門院かくれおはしまして御わざのこともはて」とあり陽名門院の崩御(一〇九六年)に際しての詠であるから、

これらはいずれも賢子の詠以後のものである。

私家集においては、もう少しさかのぼって用例を見いだすことができる。早い例は小町集所収の次の哀傷歌で、詞書には「あしたづの雲井のなかにまじりなば、などといひてうせたる人のあはれなるころ」と記されている。

⑤ひさかたのそらにたなびくうき雲のうける我が身はつゆくさの露の命もまだきえて……（六八）

しかしこの歌では、死者の面影を浮き雲に重ねて詠じてはいない。自らを浮き雲のように憂き身というために、「憂し」を言い出すために浮き雲を用いているのである。他にも賢子以前の私家集における浮き雲の用例は少なくない。

⑥うき雲に身をしなさねば久堅の月へだつともしられざりけり（兼輔集・七二）

⑦いささめにつけしおもひのけぶりこそ身をうき雲となりてはてけり（篁集・二四）

⑧わびぬればみをうき雲になしつともおもはぬやまにかかるわざせじ（齋宮女御集・一三二六）

⑨わかれても猶わすられでかつしのびとひめぐりこよそらのうき雲（惠慶集・二九七）

⑩われすまばまたうき雲もかかちなむ芳野の山もなのみこそあらめ（和泉式部統集・一〇〇）

⑪さだめなき身をうき雲にたとへつはてはそれにぞ成りはてぬべき（公任集・二九七）

⑫行衛なく空にただよふうき雲にけぶりをそへんほどぞかなしき（赤染衛門集・四六二）

⑬もえつらんよるのけぶりのさびしさにけさうき雲のたつをこそみれ（赤染衛門集・五五〇）

このように、浮き雲を詠む場合は「憂し」と掛詞にして用いられることが多かった。かなわぬ恋やかなわぬ命や無常を「憂し」と思う歎きを歌うのである。これらの浮き雲を詠じた和歌の用例をたどると我が身の憂さを浮き雲に比喻する歌が多く、雲に他者の面影を重ねて詠む歌は少ない。すなわち⑥⑦⑧⑨は自らの身が浮き雲になることを詠じているし、⑩も我が身につきまとうものとして浮き雲を用いている。これらは浮き雲という詞を用いている以外に賢子詠と共通するところはない。また⑨は題詠で「ひとひめぐり」を詠みこんだ歌であるが、浮き雲が恋しい人の面影に通うものとして詠まれている所に共通するものがある。上述の例のうち、⑫⑬の赤染衛門の二首が賢子詠と比較的類似しているといえよう。⑫は詞書に「うかべる雲のごとし」とあることから維摩經十喻の一「身者如浮雲」を詠んだ歌である。⑬は詞書に「内侍のかうの殿の御葬送のつとめて」とあって、藤原嬉子の葬儀が行なわれた万寿二（一一〇二五）年の詠である。賢子詠との類似性という点からすれば⑬が比較的近いものの、さりとて賢子がこの歌をふまえたとするには決め手にかけるように思われる。

以上、賢子詠の発想や歌ことばについて先行類歌を探ってきた。確かに、発想や詞が共通する先行歌は多く見いだせるのであるが、

しかし、賢子詠との密接な影響関係を持つと考えられる先行歌は見いだせなかった。

ところで、かつて、賢子の和歌と『源氏物語』との関連を指摘し、賢子が自作の和歌に『源氏物語』の表現をとりいれていたことを論じたことがあった。^(註13) 母の死を悼む歌とすればなおさら『源氏物語』が意識されなかったであろうか。そのような観点から以下『源氏物語』との比較考察を行ないたい。

五 『源氏物語』との関連

『源氏物語』に描かれたさまざまな場面と歌をたどると、賢子の詠じた情況とよく似た場面が数多く描かれていることに気付く。「あはれなる夕べ」はことに、おのずと空の眺められる折、人恋しい思いに浸る折、しみじみとした贈答歌をかわすのにふざわしい折として描かれている。^(註14) そして夕暮の情景についての思いは亡き人を偲ぶ思いが大半であり、詠みいだされた和歌の多くは、哀傷歌である。以下、それらの場面を具体的に見て行こう。

夕顔巻に、夕顔の死後、光源氏と二条院に宮仕えする右近とが夕顔を偲ぶ場面がある。^(註15) 「夕暮の静かなるに、空のけしきいとあはれに、御前の前裁かれがれに、虫の音も鳴きかれて・・空のうち曇りて風冷やかなるに、いといたくながめたまひて」、光源氏は「見し人の煙を雲とながむればゆふべの空もむつまじきかな」とひとりごつ。

また同じ巻の光源氏が空蟬との別れに夕顔との死別を重ね合わせ、思い起す場面で、「うちしぐれて、空のけしきいとあはれなり。ながめ暮したまひて、過ぎにしもけふ別るるも二道にゆくかた知らぬ秋の暮かな」と、夕べの空を眺めて歌を詠じるという情景が描かれている。

薄雲の巻では、藤壺の葬儀の後、光源氏は御念誦堂に籠もり一日泣き暮らす。折しも「夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれるが、鈍色なるを、何ごとも御目とまらぬころなれど、いとものあはれにおほさる」のである。そして藤壺を偲び「入日さす峰にたなびく薄雲はもの思ふ袖に色やまがへる」と独り詠ずる。

柏木巻では大臣が息子柏木の早すぎる死を悲しみ「何ばかりのことにてか、思ひさますべからむ」と、空を仰ぎてながめたまふ」折しも鈍色に霞む「夕暮の雲のけしき」に目を留めて歌を詠じるのである。

御法の巻で夕霧が紫上を追想する場面も「風野分だちて吹く夕暮れに、昔のことおほし出でて、ほのかに見たてまつりしものをと、恋しくおぼえたまふに、堪えがたく悲しければ、「いにしへの秋の夕べのこひしきにいまはと見えし明けぐれの空」と、秋の夕暮に歌が詠じられる。さらに、同じ巻で「あはれをもをり過ぐしたまはぬ御心」なる致仕の大臣が弔問の歌を光源氏に送るのも「しめやかなる夕暮にながめたまふ。空のけしきもただなら」ぬ折である。

幻巻では「ただ空をながめたまふ」「いとど空をながめたまふ」等、

時なしに空をながめ暮らしつつ紫の上を偲ぶ歌を詠じる光源氏が描かれる。ことに神無月の夕暮が「おほかたも時雨がちなるころ、いどどながめたまひて、夕暮の空のけしきも、えもいはぬ心細さ」と描かれる。

『源氏物語』に描かれた夕暮れの場面^{注6}をたどってゆくと、このように心に染みいる夕暮れの空を眺めつつ哀傷歌を詠じる場面が度々描かれるのである。中でもきわだって詳細に描かれているのが葵巻である。

葵巻には葵の上の死を悼む人々の悲しみが夕暮れの陽光が消え果てて闇夜に変わってしまうまでの時間の流れを背景に描かれる。すなわち「時雨うちして、ものあはれなる暮つかた」から「暮れ果てぬれば、御殿油近く参らせたまひて」と、夕暮が闇に変わってしまうまでの間が描かれ、その間に夫光源氏や兄頭中将や母大宮等によつて次々と葵の上を偲ぶ歌が詠み交わされるのである。その中の一首、頭中将の詠じた次の歌が注目される。

雨となりしぐるる空の浮雲をいづれのかたとわきてながめむ
賢子が歌を詠じたのと同じ折、しかも、亡き人を浮き雲によそえている点、「空」「浮き雲」「ながむ」等の用語等、賢子詠と共通する点が多い。賢子の浮き雲詠は『源氏物語』葵巻のこの和歌によつたと考えられるのである。

ところで、頭中将の詠は、劉白の詩「有所嗟」の詩句「為雨為雲今不知」「女郎魂逐暮雲歸」をふまえた表現であることが指摘されている。^{注7}頭中将の歌が詠みだされたきっかけは、光源氏が口ずさん

だ同じ詩の一節「雨となり雲となる云々」の一句であった。二人は同じ詩によつて葵の上を追悼する悲しみを共有しているのである。しかし、頭中将はもとの詩の語「雲」「暮雲」を、何故「浮き雲」と言い換えたのであろうか。そして賢子は、『源氏物語』中に多くある死別の悲しみを描く場面の中で、何故、この場面に注目したのであろうか。葵の上を追悼した歌につづけて描かれた兄の心中を見てみよう。

この場面で、頭中将は、葵の上への思いが「浅からぬほどしく見ゆ」る光源氏を複雑な思いで見つめている。「あやしう、年ごろはいとしもあらぬ御心ざしを、院など居立ちてのたまはせ、大臣の御もてなしも心苦しう、大宮の御かたざまに、もて離るまじきなど、かたがたにさしあひたれば、えしもふり捨てたまはでもの憂げなる御けしきながらありへたまふなめりかしと、いとほしう見ゆるをりをりありつるを」と、周囲が気をもんで口出したほど妹と光源氏との仲がしつくり行かなかつたことをふり返つて、生前の妹に対する光源氏の愛情の薄さに思いを馳せている。前述のごとく、この歌がふまえる詩には「雲」「暮雲」とあつた。その句を「浮き雲」といいかえたのは、「憂し」を響かせたからではあるまいか。古来「浮き雲」は「憂し」と掛詞にして用いられることの多い語であつた。妹を「浮き雲」に比喻したのは、憂き世（夫婦仲）を過ごした意味を含ませたからではなからうか。『源氏物語』中の数多の哀傷歌の中で、「浮き雲」の語を用いて死者の生前の「憂き世」を思いやつて詠じた肉親の哀傷歌はこの一首のみである。

賢子が葵卷の「浮き雲」の歌に心をとめたのは、日記や家集に憂き世を歎くことの多かつた母の人生を偲んでのことであつたと考えられるのである。

六 おわりに

賢子の詠は、発想も万葉集以来のもので、歌句のほとんどが耳慣れた用語表現を用いているため、平明で平凡な歌に見えるがちである。しかし、賢子が用いふまえたであろう表現を探って行くと、『源氏物語』葵卷の一首にたどりついた。母を追悼するために選ばれた歌ことばの、目立つことのない表現にこめられた母への思いがうかびあがつてきた。

「あはれなる夕べを眺め」て、賢子は亡き母を偲びつつ、他ならぬ母の書き残した物語に同じような場面が数多く描かれていたことを思い浮べたと思われる。また次の歌をも賢子は思い出していたかもしれない。幼い我が子が病む様子を見て詠じた母の歌である。

わか竹の生ひゆくすゑを祈るかなこの世を憂しといふものか
ら
(紫式部集・五三)

『紫式部集』には、姉の死、友の死、女院の死、夫の死等々多くの喪失の体験を語る詞書と哀傷の歌が収められている。そのような歌の中にあつて、この一首は幾多の悲しみを経て厭世観にとらわれつつも、ひとつの生命を生み育てた母親の幼子の未来を祈る姿が窺える歌である。しみじみと心に染みいる夕暮れの空に漂う「浮き雲」

を眺め、「憂き世」を生き抜いた母の面影を重ねようとして、しかし、空に浮かぶ雲はやはり雲でしかないというむなしさの中に、母を失つた悲しみを詠じたのである。

ちなみに、葵卷の和歌との表現の類似のみならず、この賢子の四句「恋しき人と」以外の句はすべて『源氏物語』の和歌に見いだせる。

見し人の煙を雲とながむればゆふべの空もむつまじきかな
(夕顔卷)

歎きわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつま
(葵卷)

雨となりしぐるる空の浮雲をいづれのかたとわきてながめむ
(葵卷)

奥山の松葉につもる雪とだに消えにし人を思はましかば
(稚本卷)

これは偶然の一致であろうか。ことに哀傷歌中の歌句が多いことからしても、これは偶然ではないように思われる。『源氏物語』葵卷に描かれた場面と心情をふまえつつ、亡き母をいう「恋しき人と」の一句を物語中の和歌に用いられた歌句によって荘厳したのではなからうか。

奇しくも『兼盛集』の巻末に書き留められて今日に伝えられた賢子の一首は、『源氏物語』作者であつた母への限りない敬愛をこめて詠じられた追悼歌であつたといえよう。

(注)

- (1) 『私家集大成 中古I』によるが、適宜仮名を漢字に直した。
- (2) 岡一男著『源氏物語の基礎的研究』(東京堂)。以下の岡氏の説はすべて同書による。
- (3) 萩谷朴著『紫式部日記全注釈』下巻解説(角川書店)。以下の萩谷氏の説はすべて同書による。
- (4) 南波浩著『紫式部集全評釈』笠間書院。
- (5) 森本元子「西本願寺本兼盛集付載の佚名家集―その性格と作者」(和歌文学研究 第三四号、昭和五一年三月号)。以下の森本氏の説はすべて同書による。
- (6) 大納言の君の詠「すめる池の底までてらすかがり火のまばゆきまでも憂きわが身かな」(紫式部集・六七)や小少将への贈歌「かげ見ても憂きわが涙おちそひてかこがましきたきのおとかな」(紫式部集・六八)等がある。また、次の初宮仕への折の詠はじめ、独詠歌にも歌われている。
身の憂きは心のうちにしたひきていまここのへぞ思ひみだるる(紫式部集・五六)
水鳥を水の上とやよそに見む我もうきたる世を過ぐしつづ(紫式部日記)
- (7) 今井源衛著『紫式部』(吉川弘文館)。また、竹内美千代著『紫式部集評釈』(桜楓社)では「親しい同性」への歌とされる。
- (8) このように考えるならば、散佚家集の編者を女性で式部と親交のあった「宰相の君」と推定される森本元子氏の説が妥当

であると考えられる。詞書の「式部の君」という書きぶりに
も、敬意と親愛の情を込めて「の君」と呼び交わした間柄
の者が記した筆致が感じられる。小少将等と憂き世を嘆き合
う歌があるが、宰相の君とも同様の贈答を行なっていたこと
であろう。

なお、高橋正治氏も「紫式部の本心を理解する身近な人」
(貴重本刊行会『兼盛集注釈』)とされる。

(9) 「同じ心に」は他にも用例は多い。紫式部の歌にもある。

いそぐくれおなじこころにたづぞなくにおもひいづる人
やたれども (紫式部集・二二)

晴れぬ夜の月まつ里をおもひやれおなじ心にながめせずと
も (源氏物語・末摘花)

以下、和歌の用例の本文はとくに断らないかぎり、『新編国
歌大観』(角川書店)によった。万葉集歌の引用は新訓によっ
た。ただし表記については適宜仮名を漢字に直した。

(10) 日本古典文学大系『日本書紀 下』(岩波書店)。

(11) 同歌は小大君集(一四二)にも重出するが、片桐洋一著『小
野小町追跡』(笠間書院刊)に小町集から小大君集に混入した
作とされるのに従う。

(12) なお、大斎院前御集の「浮き雲はとくはれにける秋の夜にゆ
く月かけのおそくもあるかな」(三六八)等のごとき自然詠の
例もある。賢子詠との関連から、単に自然の風景として浮き
雲を詠じた例はあげなかった。

(13) 拙稿「大式三位賢子の和歌における『源氏物語』享受の一樣相」(和歌文学研究 第七九号、平成十一年十二月)。

(14) 明石巻で明石の君に「つれづれなる夕暮れ……をりをり人もおなじ心に見知りぬべきほどおしはかりて、書きかはしたまふ」とある。また蜻蛉巻には明石中宮方の女房、小宰相から浮舟を失った薫に弔問の歌が届き、それを見た薫は「ものはれなる夕暮、しめやかなるほどを、いとよくおしはかりて言ひたるも、憎からず」と心動かされて、女房の局を尋ねるといふ慣れぬ振る舞いをする。贈答歌によって心を通わずのにふさわしい折として描かれている。

(15) 『源氏物語』の本文は石田穰二、清水好子校注『新潮日本古典集成』によった。

(16) 『源氏物語 語彙用例総索引』(勉誠社刊)によれば、『源氏物語』に「ゆふべ」「夕暮れ」「夕つかた」等、夕暮れを表す語の用例は約一〇例ある。それらを通覧すると、単に時刻を表すもの、男性がおとづれる折、恋の物思いにふける折、亡き人を偲ぶ折に大別される。

(17) 新間一美氏「わが国における元白詩・劉白詩の受容」(勉誠社刊『白居易研究講座 第四巻 日本における受容(散文編)』所収)に指摘されている。

なお、『源氏物語』須磨巻には、もう一例「浮き雲」を詠む歌がある。その例については、新間一美氏「須磨の光源氏と漢詩文―浮雲、日月を蔽ふ―」(甲南大学紀要、文学編七六

号、一九九〇年三月号)において、漢詩における「浮雲」、および漢詩の影響下に詠じられた和歌における「浮き雲」は、月や日を覆うもの、奸臣の比喩として用いられていることが詳細に論じられている。葵巻のこの箇所における浮き雲はそのような意味で用いられてはいない。よって須磨の巻における「浮き雲」の用例については言及しなかった。

(18) かつて賢子の和歌における古歌撰取の著しさを調査し、賢子の詠作方法との関わりを論じたことがあるが、他にも一語以外のすべてを古歌の歌句を用いて詠じた例がある。

拙稿「大式三位賢子の和歌」(文化研究一三号、平成十一年三月)参照。

